

2001年10月

広島原爆史・要約メモ

生命エネルギー研究所 所長 宍戸 幸輔

太平洋戦争の戦況概要	
日本軍の優勢： 最初の6ヶ月	比率 1
日本軍の劣勢： 後の36ヶ月	6

年	月日	◎ 日本の行動・対応	☆ 米英の対応・反撃 欧州の戦況	● 原爆製造。投下準備
1941 昭和16年	12月 8日	日本軍真珠湾攻撃・マレイ半島上陸		
	12月25日	日本軍香港攻撃		
1942 昭和17年	1月 2日	日本軍マニラ占領		
	1月18日	日独伊三国同盟締結		
	2月15日	日本軍シンガポール攻撃		
	3月 1日	日本軍ジャワ島上陸		
	3月 8日	日本軍ラングーン占領		
	3月27日	日本軍スマトラ占領		
	5月 7日		米軍総力結集総反撃開始 ミッドウエイ海戦 日本海軍大敗	
	8月 7日		第一次ソロモン海戦・米軍ガダルカナル島上陸	
	9月23日			マンハッタン計画発足、レスリー・グローブス准将 総指揮官となる
	11月20日		ソ連軍 ドイツへの反撃開始 スターリングラード ソ連軍反撃	
1943 昭和18年	1月11日		米・英・華 新条約を締結	
	1月14日		ルーズベルト米大統領とチャーチル英首相 戦争指導会議 (カサブランカ)	

年	月日	◎ 日本の行動・対応	☆ 米英の対応・反撃 欧州の戦況	● 原爆製造。投下準備
1943 昭和18年	2月 2日		ソ連軍 スターリングラード奪回 独軍降伏	
	2月 9日		ガダルカナル島 日本軍敗退	
	7月10日		連合軍 シシリー島上陸	
	9月 9日		イタリア バトリア政権無条件降伏	
	9月中旬			マンハッタン計画軌道に乗る 発足からわずか12ヶ月
	11月27日		カイロ宣言発表 日本への反撃戦線統一 中国援助のための米・英・華三巨頭会談	
1944 昭和19年	1月 9日		欧州東部戦線でソ連軍の攻勢始まる	
	4月 8日	日本がソ連に、独ソ和平斡旋を申し出るもソ連が拒否		
	6月 6日		連合軍 北仏ノルマンディに上陸	
	6月19日		マリアナ沖海戦 日本海軍敗北	
	7月 8日		インパール作戦 日本陸軍大敗	
	7月16日		サイパン島 日本軍玉砕	
	7月18日	東条内閣総辞職	米軍 テニアン島占領	
	7月21日		米軍 グアム島占領	
	7月22日	小磯内閣・米内光政内閣成立		
	8月29日		連合軍パリ占領	
	10月上旬			マンハッタン計画 第509混成部隊（隊長 チベッツ大佐）グローブス総指揮官の下で発足 総勢 将校225名、下士官 1542名 B-29 爆撃機14機 改造機 3機
	10月24日		フィリピン沖海戦	
	11月24日		米空軍B-29 東京へ初偵察	
	11月25日		米空軍B-29 初めての東京大空襲	
	12月 7日	東南海地方の大地震 死者998名		
12月25日			グローブス総指揮官報告 1945年8月までに 原爆2個完成の見込み	

年	月日	◎ 日本の行動・対応	☆ 米英の対応・反撃 欧州の戦況	● 原爆製造。投下準備	
1945 昭和20年	2月 4日		米・英・ソ三巨頭 ヤルタ（ソ連領クルミア半島）で対日戦争に基本作戦の協議を開始した。		
	2月11日		『ヤルタ協定』成立。ソ連はドイツ降伏後3ヶ月以内に対日参戦することを約束した。		
	3月 5日		マニラ日本軍守備隊全滅		
	3月10日		米空軍B-29 爆撃機130機 『東京大空襲』		
	3月12日		名古屋空襲		
	3月13日		大阪空襲 以後、日本全国の中小都市まで波状攻撃を繰り返す。		
	3月17日		硫黄島守備軍全滅		
	3月19日		日本軍ビルマ・マンダレーより撤退		
	4月 1日		米軍 沖縄本島に上陸開始		
	4月 5日	小磯内閣総辞職			
	4月 7日	鈴木貫太郎内閣成立			
	4月12日		ルーズベルト米大統領死去、副大統領トルーマンが直ちに大統領に就任		
	4月22日	佐藤駐ソ大使、ソ連外相モロトフに『両国間の友好関係』を再確認した。変更ないと安心した。			
	4月28日		イタリア元首相ムッソリーニ イタリアのパルチザンにより処刑される		
	4月30日		ヒトラー総統 デーニッツを後継総統に指名して自殺		
	5月 8日		ドイツ 無条件降伏状に署名		
	6月 1日				原爆2個完成 暫定委員会決定（無警告で速やかに日本に原爆を落とすべし。目標都市は京都・広島・小倉・長崎
	6月11日				フランク委員会(64名の在シカゴのユダヤ人化学者)が陸軍長官に(直ちに対日原爆投下作戦を中止せよ)と強く要求したが、門前払いされた。
6月18日			米国首脳部（日本本土作戦会議）を開催		

	月日	◎ 日本の行動・対応	☆ 米英の対応・反撃 欧州の戦況	● 原爆製造。投下準備
	6月21日	日本軍 沖縄守備隊全滅		
	6月28日		米軍 フィリピンルソン島の日本軍を完全制圧したと発表	
	6月30日		宋子文 モスクワ訪問 スターリンと会談	
	7月12日	天皇 近衛に訪ソを指示。政府は直ちに佐藤駐ソ大使に対して(近衛特使派遣の交渉)を指示す。 (注) この暗号電報は米国が傍受解読して、状況を把握していた。		
	7月13日	佐藤大使からソ連政府に使節派遣を申し入れる		
	7月15日		ポツダム会談のため、米・英・華三国の首脳集合	
	7月16日		実験成功後トルーマン大統領自信を持ち対ソ姿勢を強固に変える。	米国ニューメキシコアラモスで原爆実験大成功 英国チャーチル首相にも報告、
	7月17日		トルーマンは気分を良くしてスターリンを訪問 スターリンは日本からの申し入れの電報を見せてトルーマンの指示を仰ぐ。(a)仲介を引き受ける 仲介を断る◎返事を引き延ばす。トルーマンは◎を指示した。 (情報の出所)1960年ポーレン(国務省顧問・会談通訳)のメモによる。	
1945 昭和20年	5月～8月	日系アメリカ人女性を徴用して米国の『ザカリアス放送』を傍受し、第二総軍大屋角造参謀に提出するために献身的に働かせた。7月27日の『ザカリアス放送』の内容は別紙の通り。『ザカリアス放送』は5月8日から8月4日まで14回にあった。		
			ドルフィン機関(北欧の中立国の最高官で、連合国のために日本の秘密情報を流し続けていた)の情報の内容はきわめて正確なものであり、米国の最高機関もその信憑性を信じていた。従って天皇が中心となっている和平工作が真剣に進行している事実も熟知していた。 要するに『原爆投下』の必要性はなかったのである。	

	月日	◎ 日本の行動・対応	☆ 米英の対応・反撃 欧州の戦況	● 原爆製造。投下準備
	6月～		『ポツダム宣言』の草案作成の経緯。 6月18日頃より国務次官グループを中心にとりまとめに努力した。その中で大いに議論の中心になったのはやはり『天皇制存続』問題であった。 即ち第12条後半に『我々は現皇室のもとにおける立憲君主制を排除するものではない』という項目を入れるかどうかであったが、ぼやかした表現になった。(a)ポツダム宣言を拒否されたら原爆投下する(b)原爆投下する前にポツダム宣言を出すそのいずれか、という決断であった。	
	7月25日		『原爆投下命令』発令。ポツダム宣言発表の1日前である。即ち、ポツダム宣言はどこまでも形式的なもので、日本が受理するしないに無関係であった。	
	7月26日		『ポツダム宣言』発表 ソ連は勿論英国にも相談なく米国の独断で作成して発表した。	
	7月26日			原爆本体を積んだ巡洋艦インディアナポリスがテニアン島に到着陸揚下。それから4日後の7月30日に日本の潜水艦伊号58に撃沈された。
1945 昭和20年	7月29日			原爆の重要部品がロスアラモスからサクラメント経由で3機で出発し1機事故、2機が無事に8月2日(広島原爆投下の4日前)にテニアン島に到着した。事故機はその名も『のろま歩きの竜』で離陸に失敗し太平洋飛行を中止した。いろいろな悪条件を奇跡的にクリアできたことは驚きである。

	◎ 日本の行動・対応	☆ 米英の対応・反撃 欧州の戦況	● 原爆製造。投下準備
	<p>『ポツダム宣言』に対する日本政府の当惑・対応 日本政府が理解に苦しんだ『あいまいさ』</p> <p>(1)日本と不可侵条約を結んでいるソ連がポツダム会議に出席している。(2)『無条件降伏』の要求は威嚇にすぎない。(3)回答の期限が示されず。</p> <p>日本政府としては対ソ交渉が継続中であるから法的中立国のソ連への仲介依頼を捨てる訳にはいかない。その点東郷外相と鈴木首相は同一意見。『ソ連からの正式回答待ち』が外交儀礼である。</p>		
8月1日	<p>鈴木首相は『公式コメントを差し控えるとともにそれを黙殺する』と公言した。全閣僚もポツダム宣言の中の『迅速且つ完全な壊滅』という言葉の重みを理解できなかった。</p>	<p>米国は鈴木発言を日本が『拒否』したと勝手に判断して『原爆投下』の正当条件に悪用した。</p> <p>暫定委員のバード海軍次官が、人命損傷の少ない原爆投下作戦を主張し、大統領に進言した。しかし拒否されたので即座に辞任した。</p>	<p>米国首脳階級の考え方</p> <p>(1)原爆を活用できるようになったのでソ連参戦の必要はなくなった。むしろ断るべき。</p> <p>(2)従ってソ連参戦予定日の8月8日以前に『原爆投下』で勝負をつけたい。</p> <p>ポツダム宣言だけで日本降伏に導きたくない。どうしても原爆投下を断行したい。(その理由)(a)40億ドルの巨費を議会の承認なしで使用したので成果を出したい。</p> <p>(a)戦後の米国優位性(特にソ連に対して)を維持するためのデモンストレーション</p> <p>(b)折角完成した原爆の性能を確認したい</p> <p>従って絶対無警告でできるだけ多くの日本人を惨殺させる必要があった。</p>